

研究論文

奄美諸島方言の世代間変容

— 場面設定の対話資料による —

町 博光 (広島大学)

奄美諸島では、急速な勢いで共通語化が進み、伝統的な方言が消失する寸前である。

本論文は、奄美諸島の与論島方言をとりあげ、対話資料により、世代間の方言変容の実態をしめし、どのような言語要素からどういった変化がおりつつあるのかを分析したものである。以下のことを明らかにし得た。

1. 70代から50代そして30代と音声事象を中心に著しい共通語化が進展している。共通語語彙は、70代では伝統的語形が用いられているが、50代以下では方言の音韻体系にあわせてとりいれられ、世代間の方言差を形成している。

2. 共通語化が進展しているものの、30代でも、方言使用に抵抗感がなく、方言は生活語として機能している。

3. 10代では、ほぼ完全に共通語化が進み、方言はすでに消失している。彼らの話す共通語は、奄美普通語と呼べる特徴を持っている。

キーワード：奄美諸島方言、世代差、変容、奄美普通語

The Language Transformation of Amami Islands Dialect

Hiromitsu MACHI (Hiroshima University)

Traditional dialects in Amami Islands are being rapidly replaced by the Standard Japanese. This research investigates Yoron Island dialect and analyzes generational differences in the language transformation. The following points are to be presented:

1. A tendency toward the standardization of Amami language is more apparent in the younger generation.
2. Yoron people in their thirties speak the Yoron Island dialect as everyday language.
3. The teenagers has lost the traditional dialect and uses Amami common language which is a mixture of the Standard Japanese and the dialect.

Key words: Amami Islands dialect, differences, Amami common language

1. 奄美諸島方言の現状

奄美諸島では、現在、すさまじい勢いで在来の方言が衰退しつつある。戦前から戦後にかけての方言撲滅運動の顕著な成果として、現在の奄美諸島で、いわゆる全国共通語（以下、共通語）が理解できず話せない人を見つけ出すことはまず不可能である。理解し話せることができればよいというレベルにお

いては、完全な共通語化が成し遂げられたのである。いっぽう、共通語化の進展にともなって、在来の伝統的な方言（以下、方言）は、確実に衰退し変容をせまられている。いまや、まさに滅亡の危機に瀕している状況である。

現在でも、在来の奄美方言と共通語とで、お互いの意思の疎通をはかることは困難である。それほど方言差は大きい。

共通語化の進展にともなって、祖父母・父母・孫同居の三世代家族では、同一家庭内での言語の三世代分化がおこる。すなわち、方言を主として使用する祖父母世代、共通語を主として使用する孫世代、方言と共通語を相手によって使い分ける父母世代が同一家族内に同居することとなる。

2. 本稿の目的・方法

このような奄美諸島方言の現状に注目して、2002年以來、奄美諸島方言の位相論的な言語生活調査をおこなっている。以下には、奄美諸島の最南端の与論島方言を対象に、バイリンガルとしてみた奄美諸島方言の言語生活の実態を明らかにしていきたい。対象となる与論島は、人口7000余人(2002年現在)、一島で一町の島である。鹿児島県の最南端に位置し、沖縄本島北端まで約28kmである。方言的には奄美沖縄方言に区分され、沖縄本島方言との似通いが強い。島の方言はさらに3区分されるが、会話に支障をきたすものではない。ほとんどの住民が、本土(多くは東京、大阪)に働きに出た経験があり、共通語の話せない人はいない。

2.1 調査の内容

言語生活の全的な把握をめざして、方言会話を収録することとした。自然談話のみでは、世代間の比較が困難と予想されるため、ある程度の同一内容の比較を可能とするために場面設定の会話をおこなってもらうことにした。基本的に、文化庁の「緊急方言調査」の要項を参照している。会話は10の大場面(21の小場面)に分かれる²⁾。若年層には、依頼や勧誘場面などを中学生用に変更している。

調査日時 2003年3月26日～同29日

調査者 町 博光(与論島出身、15歳まで与論島で生育)・西村浩子(愛媛県松山市出身)

話者 それぞれの年代で、親しい友人同士という条件で話者を依頼した。70代男性2 女性1、50代男性2 女性2、30代男性2 女性1、10代男性2 女性1となった。全員が与論島の朝戸集落の出身である。

2.2 先行研究

世代差に注目したまとまった研究としては、国立国語研究所(1978)があげられる³⁾。琉球方言の新しい方言(新沖縄口)については、本永(1984)、高江洲(1994)などがある。永田(1996)は、琉球方言を対象としたこの種の調査としてまとまったものである。

以上のように、世代間の言語変容の解明を目的にした調査研究も確実に積み重ねられているが、4世代にわたり、場面を限定した会話形式で、奄美各島での比較を試みた研究はまだおこなわれていない。

3. 与論島方言会話の実際

世代ごとの会話が実際にどのようにおこなわれているかを文字化資料でしめし、その特徴についてみていきたい。「II依頼(1物を借りる)」をとりあげる。「依頼」場面をとりあげるのは、「物を借りる」という明確な目的を持った会話行動であり、定型化した表現が各世代から得られやすいと判断したからである。話者を識別するために、70mYのように記す。70代の男性(mで話者の頭文字(Y)をとったものである。?はグロッタルストップをしめす。文アクセントは省略する。

3.1 70代の会話

70mK ?aʃiʃi hadi putʃaru ?atunati kittu
ja:nuʔuikati nubuti totanma:gi:
?uttʃikiribadu najui.to: paʃigo
Fa:tʃikurirjo:ʔutudʒabi.

あれあれ、台風の吹いた後なので、あれ、家根の上に登ってトタンを取り付けなければならぬ。ああ、梯子を貸してくれ、兄弟。

70mY ?idaʔida de:ru.ʔama ?ijungatanu unu
Fubinai tattʃiʔe:kutu ?uma ?idʒi tuti
mutʃiʔwa:rjo:.

どうぞどうぞ。あそこ西側のその隅にあるからそこに行って持って行ってください。

70mK ?ai to: gambo: gaʃukutu jutta:ʃa
tʃikko:tikaradu mutʃikjun do: ?utudʒabi.

ああ、そんならそうするから丁寧に使ってから持ってくるよ。兄弟。

70mY ?ai.joiioi tʃikko:ti najun do:.

ああ、ゆっくり使っているよ。

台風のことを hadi (風) と伝統的方言を用いている。係助詞 du (ぞ) の結びは、najui の i 終止形で結び連体形で結んでいない。梯子が paʃigo と P 音化している。

3.2 50代の会話

50mO to: tandi paʃji: Fa:tʃi mi:ba.tandi.?ama totan tattʃikiribadu najuttʃo:Fune:danu hadiʃi itʃa:ma puipagigama ʃitʃuiʃe:ʃiga. ?amakuta:ma tandi paʃi Fa:tʃikurirjo:.

ええどうか、梯子を貸してください。どうか。あそこのトタンを立てつけねばならないんだよ。このあいだの台風で吹きはがされかかっているのだが。しばらくどうか梯子を貸してください。

50mM ?ase paʃa: ?ida:naige:ra ?amanaganai ?ajutaʃiga. ?ura tume:ti mutʃi pai.

ああ、梯子はどこにだったか、あそこらにあったが。おまえ探して持って行ってくれ。

50mO to: gaʃumbo: tandi.ʃuma ja:nu ?ussu:kara tuti ?idʒi tʃikko:tikjun do:tʃikken do:tandi.

ああ、そうなら、ああ家の後ろから持って行って使うよ。使うよ。どうか。

50mM ?ida: ?ida:de:ru. tandi tandi. mutʃi ?idʒi tʃikko:tikuriri.

どうぞどうぞ。どうぞどうぞ。持って行って使ってくれ。

梯子を paʃji: と言っている。台風を hadi と呼んでいる。台風を hadi と呼ぶのは 70 代と 50 代である。係助詞 du も強調の用法として終止形で受けている。「なる」の i 終止形 najui + 文末助詞「よ」相当の tʃo:)

3.3 30代の会話

30mY ?a: Fune:danu taiFu:ʃi ja:nu tudijo: tjo:. ?ai: ?uridum mata ʃonʃi na: ?itʃa ʃiribo: najunge:ra wakaradʒiʃe:ʃiga ʃi:nu ne:dana ʃidʒi.paʃji:nu ne:danaʃidʒi ?ura tu:ra: nennui tjo:.

ああ、この間の台風で家が飛んでね。ああ、それをまたほんともうどうすればいいのかわからないけれど。木がなくて、梯子がなくて。おまえのところはないのかね。

30mS ?a: ?a:ijo: wa:tʃagaʃin tudifʃe:ʃiga kino: jattukattu no:tʃi da:do:ka.ʃunu paʃji: ?e:rabo: (Y ?ama) ?ussu:nai ?aikutu.

ああ、あれ、私の家も飛んだんだが、昨日、どうにかこうにか直したんだ。その梯子なら(あそこ)後ろにあるから。

30mY ?e: ?ama tuti najummi:ʃe: ?e:ʃupi ga:ma waititaba:ri tandi.

ええ、あそこを取っていいか。え、え、少しだけ分けてください。どうか。

30mS mudusanban najun.dondon tʃikko:ti ?wa:ri. ?uriga kawai ?uriga kawai:sa: dʒumbiʃi ?wa:rja:.

戻さなくてもいい。どんどん使ってください。そのかわりそのかわりのものは準備しておいてくださいよ。

30 代でもまだ方言が自在に話せる。梯子を paʃji: と呼んでいる。敬語の taba:ri や ?wa:ri も使いこなせている。ただし、台風のことは共通語形の taiFu: と呼び、共通語化している。

3.4 10代の会話

10mM masaaki.
政明。

10mI nani:.
なに。

10mM taiFu:de janega kowaretakara ʃu:rinotameni haʃigo kaʃite.

台風で屋根が壊れたから修理のために梯子を貸して。

- 10mI i:jo.
いいよ。
- 10mM dokoni aru no.
どこにあるの。
- 10mI sokono so:kononakae haitteru.
そこの倉庫の中に入っている。
- 10mM dga: tottekara tsukau jo.
じゃあ、取って使うね。
- 10mI a: i: jo.taisetsuni tsukatte ne.
ああ、いいよ。大切に使ってね。
- 10mM un.kowajiwa jinaikara daidgo:budato
omo:. baibai.
うん。壊しはしないから大丈夫だと思う。
ばいばい。
- 10mI baibai.
ばいばい。

10代の会話は共通語でおこなわれており、方言は出現しない。彼らは方言をほとんど理解しないし話せない。この会話を収録する際にも緊張はなく、普通の調子であった。taiFu: (台風) hafigo (梯子) ju:ri (修理) といった単語も共通語である。ただし、tottekara (取ってから) のような、接続詞「て」に「から」を複合させた tekara の西日本方言的な用法がみられる。baibai は、「じゃあね」にあたる軽い挨拶として他の会話場面でもよく用いられている。また、他の奄美諸島の若年層の会話でもよく聞くことができる。

共通語的な会話ではあるが、全体的に文章翻訳体とでも呼べるような言いまわしである。たとえば、10mM の発言の、「台風で屋根が壊れたから修理のために〜」の「〜で〜から〜ために〜」などは、主述が整えられた文章体を読んでいるのを聞いているようである。同級生の親しい者同士の会話では、より短文で、文末助詞が挿入された文が話されると考えられる。同じく 10mM の発言の「どこにあるの」や 10mI の発言の「そこの倉庫の中に入っている」なども説明的である。「どこ?」や「倉庫の中(だよ)」などの言いかたとくらべると硬い印象を受ける。

3.5 まとめ

同世代同士の会話では、70代50代30代が方言での会話である。特徴的なのは、30代でまったく不自由なく方言が使われていることである。共通語化が進行していて、中年世代以降は方言が話せなくなっているということが予想されていたが、30代で日常的に方言が使用されているのである⁹⁾。しかも、新沖縄口のようなより共通語的な中間言語でなく、伝統的な方言が用いられている。方言の衰退が30代で食い止められているかのような印象を持つ。ただし、この30代の様相が、奄美諸島全体において今後とも続くとは考えられない。

30代は、学校教育では、もはや方言矯正を強制されることはなかったという。方言を話すことに劣等感を持たなかったという。方言が話せる祖父母世代と父母世代に囲まれ、しかも学校教育を中心とした共通語にも囲まれ、共通語と方言の自由な二重生活が可能となったのだろう。50代以上の無理矢理共通語教育を受けた暗さは30代には存在しない。

10代の会話では、一転してまったくの共通語的な会話である。しかも、彼らは、方言を使うかとの質問に対して、「方言はわからない」と答える。20年後に彼らが現在の30代のような伝統的方言を獲得するとは思えない。ただし、彼らの話す共通語が、文章語を翻訳したような文体であることには注意を払っておく必要があろう。

4. 方言の世代差

以下には、場面設定の会話資料から、方言の要素に注目して世代間の推移をみていく。とりあげる方言事象は、あくまで会話資料の中からのということに限定する。例文の最後に話者を記号でしめす。また、使用された会話場面も注記する(あいさつ場面は特立するので注記しない)。例文の使用頻度は、それぞれの世代においてはすべて普通の会話である。共通語訳の他に、方言の例文の理解を助けるために、適宜〈〉の中に逐語訳を付す。

4.1 あいさつ表現

あいさつ表現からみていこう。

4.1.1 道でのあいさつ(朝)

70代の「I あいさつ」の「5道でのあいさつ(朝)」の、

1 wugamja:biran. (70mY)

〈拝みましょう。〉

おはようございます。

は50代以下には聞かれない古いあいさつである。

「4辞去」の、

2 gaJumbo: wuitfimiti ?wa:rjo:. (70mK)

〈それならば 気を付けて おはれよ〉

じゃあ、気を付けて行ってらっしゃい。

の wuitfimiti (気を付けて) の言いかたも、50代以下には聞かれない。

50代では、「5道でのあいさつ(朝)」は、

3 hampe:sa ?ida:tiga tjo:. (50mO)

〈かく早さ どこにか てよ〉

こんなに早くどこに行くのか。

であり、wogamu (拝む) の言いかたは聞かれない。

辞去は、

4 gaJumbo ki:t?ikiti ikjo:. (50mM)

〈それならば 気を付けて 行けよ〉

じゃあ、気を付けて行けよ。

であり、wuitfimiti は聞かれず、共通語的な ki:t?iti (気を付けて) に変わっている。

30代では、

5 ?ijai ?ijai nugatjo: gampe:sana:kara nu:fitji ?entfiga tjo:. (30mY)

〈おい おい 何かよ かく早さから なにして いらっしゃる てよ〉

まあまあなんですか、こんなに早くからなにをしていらっしゃるのですか。

のように、相手の「朝の早いこと」に注目したあいさつとなっている。辞去は、

6 gambo: mata ?wa:rjo:. (30fI)

〈それならば また おはれよ〉

じゃあ、またいらしてくださいよ。

で、「またの機会」を願う言いかたとなっている。

表1 あいさつ表現の発想

	朝のあいさつ	辞去のあいさつ
70代	(相手)を 拝む	(相手に) 気を付けて
50代	朝の早いことをたたえ どこに行くかを問う	(相手に) 気を付けて
30代	朝の早いことをたたえ どこに行くかを問う	またの機会を待つ
10代	どこに行くかを問う	またの機会を待つ

10代は、

7 o:i o:ta doko iku no. (10mM)

おおい、大田、どこ行くの。

で「相手の行き先」を問う言いかたである。辞去は、

8 mata i?fo ?ukudai fijo: ne.baibai. (10mM)

またいっしょに宿題しようね。ばいばい。

で、「またの機会」を願う言いかたである。

発想法の面から、あいさつ表現を整理してみると、表1のようになる。

「朝のあいさつ」では70代と50代に差が認められ、「辞去」では、70代・50代が「気をつけて」の発想であり、30代・10代が「また会おう」との発想になっている。

4.1.2 感謝のあいさつ

感謝のあいさつでも、「道でのあいさつ」と同様の傾向が指摘できる。70代では、伝統的方言形の to:tugana?i が聞かれ、50代では伝統的方言形の to:tu do:, 共通語形の ?arigato: do: の両形が聞かれる⁹⁾。30代・10代では共通語形の ?arigato: のみが聞かれる。

4.1.3 応答の表現

応答の表現でも、年代ごとの顕著な違いがみられる。70代では ?o: do:ka (はい、どうも) のように、応答詞の ?o: が用いられている。50代と30代では hai do:ka (はい、どうも) のように hai が用いられ、10代になると共通語形の un wakatta (うん、わかった) となる。

共通語化の観点からみると、方言を話している

70代と50代・30代の間にも断層がみられる。それに完全な共通語世代の10代を加えて三世代分化が観察されるのである。

4.2 音声

各世代ごとの特徴的な音声事象を抜き出しておく。

70代

h音のP音化やグロッタルストップ?が残っている⁶⁾。kwa音も聞かれる。摩擦音のʃ音もよく聞かれる。また、u>i, o>uの音変化もよく観察される。u>i, o>uの音変化は、共通語形の音韻の一部を変えることにより方言的色彩の強い語詞を作っている。

- /P/ paʃʃi: (梯子) pagi (足<脛)
- /?/ ?un (海) ?iikjun (行く)
- /kwa/ kwanke: (関係) kwa: (子)
- /ʃ/ ʃentei (剪定) ʃinse: (先生) ʃeito (生徒)
- /u/> i hatʃimaga (初孫)
- /o/> u gurukuman (5・6万) kundu (今度)

50代

特徴的なことが2点指摘できる。一つは、P音とF音とが併存していることである。二つは、同様にS音とʃ音の両音が観察されることである。伝統的な方言音声と共通語的な音声が過渡期にある状況をしめしていると考えられる。

- /P/ paʃʃi: (梯子) pukipagi (吹きはがれる) jukaputu (良いこと)
- /F/ Fugjun (漕ぐ) jukaFuta: (良いことは)
- /?/ ?inu (犬) ?umaga (孫)
- /kwa/ kwa: (子)
- /ʃ/ do:kju:ʃei (同級生) naʃe (名瀬) ʃense: (先生)
- /s/ sense: (先生) seito (生徒)
- /o/> u nantuka (なんとか) ukagisaman (おかげさまで)

30代

30代でもP音とF音が併存している。?, kwa, ʃも残っている。r音の脱落が認められる。u母音がo母音に変化すると、かなり共通語的な印象を受ける。たとえば、格助詞nu (「の」) が共通語のno

表2 音声事象の世代差

	70代	50代	30代	10代
P	○	○	○	×
?	○	○	○	×
ʃ	○	△	×	×
kwa	○	△	×	×
F音化	△	△	△	×
h音化	×	×	△	○
o音	×	×	○	○

○はその事象がみられるもの
 ×はその事象がみられないもの
 △はその事象が混在しているもの

になると, jasuono wubanka (ヤスオ<人名>)のおばさん) ?akibinno kaiʃu: (空き瓶の回収) のように共通語的な言いかたとなる。

- /P/ pattai (畑) gujo:po: (回覧板) jukaputa: (良いことは)
- /F/ Furusato (古里, 地名) Fa:tʃi (貸して)
- /?/ ?inkan (印鑑) ?inu (犬)
- /kwa/ kibaraʃikwa: (働き過ぎ)
- /ʃ/ miʃe (店)
- /r/脱落 ?ataime: (当たり前) kanna:ʃi (必ず) wakainikusa (わかりにくさ)
- /o/> u ʃigutu (仕事) tʃimui (つもり)

10代

10代の音声事象については、共通語的な発音である。

以上の結果をまとめると、表2のようになる。年代差がかなりはっきりと読みとれる。とくに30代で音声の共通語化が顕著にみられることが指摘できる。

4.3 語詞

各年代の語彙を、伝統的方言に特有のものと、共通語と同形または共通語に対応形の認められる共通語的な性格のものに分けてとりあげていくこととする。そのことによって、年代による語彙の共通語化の状況が把握されよう。

70代 50代以下と比較して、70代の方言に特有

と考えられるものは以下のようである。

witfimiti (気を付けて) hadi (台風) tajui (ついで) jagaku (公民館<夜学) gujo:po: (回覧板<御用報) ?e:d3irasai (やさしい) finen (はまる)

50代になると, witfimiti は ki:tʃikiti (気を付けて) jagaku は ko:minkan (公民館) となっている。共通語に対応形の認められるものには,

mimai (見舞い) hatʃimaga (初孫) taiʃin (退院) jentei (剪定) massugu (まっすぐ) migi: (右) pid3ai (左) sugu (すぐ) hariai (張り合い) kambjo: (看病) daid3ina (大事な)

などがある。方言に対応形のない漢語と副詞の多いのが注目される。

50代 70代とくらべて, 方言に特有のものが少ない。感嘆詞や代名詞・文末助詞などには方言が用いられる。

?asse (あら) na: (もう) to: (さあ) ?aijo: (あれ) minginupitʃu (なんとまあ) gaʃʃuru (そうする) Furi (これ) ?uri (それ) tjo: (よ) tibo (てば) ga:para ʃun (迷惑をかける)

いっぽう, 共通語に対応形の認められるものには, gitotsu (ひとつ<副詞>) mata (また) so:dan (相談) dekirudake (できるだけ) nantoka (なんとか) migi (右) sugu (すぐ) tanto: (担当) ko:minkan (公民館) meiwaku (迷惑) kekkonʃiki (結婚式) taikaku (体格) teinen (停年) hora (ほら) saikin (最近) genki (元気) など多くのものをあげることができる。70代と同様, 漢語の導入と副詞の共通語化が目立つ。

30代 伝統的方言に特有の語としては, ?atadaman (急に) の一語である。共通語に対応形の認められるものに,

tamanja: (たまには) saiko: (最高) jukkuri (ゆっくり) rjo:jo: (療養) massugu (まっすぐ) ko:dza (口座) ?otsuri (お釣り) suidzokukan (水族館)

などがある。方言に対応形のない漢語と副詞の多いことが目を引く。

30代の語彙で注目されることは, 共通語形の一

部を伝統的方言の音韻体系に合わせた新語形が多くみられることである。

<o が u に> tubikakati (飛びかかって) kondonu (今度の) tʃottu (ちょっと) jurukubatʃi (喜ばして)
<e が i に> ginni (げんに)
<r の脱落> ʃikka_i (しっかり) waka_inikusa (わかりにくさ)

方言の基本的な文法体系と音韻体系を保ちながら, 積極的に共通語形をとりいれている30代の語彙状況が浮き彫りにされる。伝統的な方言の音韻体系を基盤として, 共通語語彙を方言の音韻体系にあわせ, 方言と共通語の中間語形として自在にとりいれている。30代での, 伝統的方言と共通語使用の自在さがこのような形になって出てきたものであろう。そこに, 伝統的方言と共通語のはざまで生きる, 奄美諸島方言域の30代の方言使用の特質が存在するといえよう。

5. 奄美普通語の成立

10代の共通語的な表現の中に, 方言的な表現の混じったいわゆる新沖繩口のような表現が観察される。そのいくつかの例をとりあげよう。

① 体現化表現

9 joronniwa itsu kaette kuru wake. (10mI, 出産祝い)
与論にはいつ帰ってくるの。

10 asatteniwa tabun kaettekuru hazu. (10fO, 出産祝い)
あさってにはたぶん帰ってくるだろう。

などの例にみられるように, 名詞形の wake (訳) を文末助詞「の」に相当するものとして, また hazu (筈) を推量の意で用いている。これらは沖繩大和口にも認められるものである。

② 文末助詞

11 imakara tʃabanani iku tʃo:. (10mI, 依頼)
いまから茶花<地名>に行くよ。

12 kekkō:kawai: tʃo:. (10fO, 結婚祝い)
けっこうかわいいよ。

文末助詞 tʃo: を方言と意識せずによく用いている。

③「行く」と「来る」

13 dʒa: kondo ʃenko: ageɲi kuru wa. (10fI,
不祝儀)

じゃあ今度線香をあげに行くわ。

「線香をあげに行く」というところを「来る」と言っている⁷⁾。

④「から」

14 dʒa: kaette karadao jasumetekara aʃita
tʃanto kite ne. (10mI, 願望・許可)

じゃあ、帰って身体を休ませて、明日ちゃんと来てね。

15 ʃi:di: kowaʃitakara kattekara kaesu ne.
(10mM, おわび)

CDを壊したから買って返すね。

jasumetekara と kattekara の「から」はともに共通語では不要である。

奄美諸島で話されるいわゆる「方言混じりの共通語」を、名瀬市では「トン普通語」(トンは薩摩芋のこと。鹿児島市などでいう「からいも普通語」に対応する)と呼んでいる⁸⁾。「薩摩芋」の方言名をとり入れたこの呼称に、50代以上は卑下した感情を持っていた。しかし、方言矯正や共通語教育の無理強いを受けなかった30代にとっては、方言か共通語かの二者択一ではなくて、方言も共通語もどちらでも選択できる世代である。そこにはすでに、方言撲滅が唱えられた時代の方言につきまとう暗さは存在しない。この流れを受けた現在の10代は、彼らの話す共通語に方言的な要素があることさえ感じていない。tʃo: のような方言的な文末助詞も積極的に受け入れている。「方言は好きか」との問いにも「好き」と応じる。新しい奄美普通語が誕生している。

6. 奄美方言の将来

本稿で指摘し得たことは以下のとおりである。

①共通語化の観点からみれば、年代が下がるにしたがって確実に共通語的な要素が増えている。ただし、伝統的方言の残存という観点からみれば、三世

代分化というよりも、伝統的方言と共通語の両方を話せる30代以上とそれ以下の世代の二世代分化になっている。

②30代では、共通語化の進展をくいとめるかのように、日常語としての方言使用がさかんにおこなわれている。

③30代の話す方言には、多くの共通語語彙を伝統的方言の音韻体系にあわせて中間方言形としてとりこんでいる。

④10代では、伝統的方言の使用はまったく認められない。ただしその共通語は、文章語翻訳体といった直訳体である。

⑤10代では、奄美普通語がすでに確立している。方言消失の危機的状況にある奄美諸島方言にあって、各島各方言ごとにその衰退状況は異なっている。最近の方言復権の動きにも連動して、30代では方言を話すことに抵抗感を持っていない。ただ、抵抗感がないからといって、これから30代以下で方言が復活するとも断言できない。伝統的方言の最後の砦が30代ということであろう。

10代では完全に共通語化がなされている。10代が、生活語として伝統的方言「島ことば」をこれから身につけていくことは予想できない。

奄美諸島方言では、方言と共通語の両方が話せるバイリンガルとしての共通語化から、共通語しか話せないモノリンガルとしての第2の共通語化がすでに始まっている。

注

- 1) 平成14年～16年科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 課題番号14310195(代表 町博光)「バイリンガルとしてみた奄美諸島方言の位相論的研究」による。
- 2) 「場面の概要一覧」をしめす。

- I あいさつ 1見送り(釣りに行く夫を見送る) 2 迎え(釣りから帰った夫を迎える) 3訪問(近所の家を訪問) 4辞去(夕食をご馳走になり帰る) 5道でのあいさつ(朝, 昼, 夜, 夕) 6 祝儀(本家の長男の結婚を祝う) 7不祝儀(隣人の妻の死を悔やむ) 8出産祝い(兄に初孫の誕生を祝う) 9病気見舞い(入院している友人を見舞う)

- II 依頼 1物を借りる(隣家から梯子を借りる) 2
依頼(街に行く隣人に買い物頼む 3無心(親
友に借金を頼む)
- III 指示・助言 1指示・助言(剪定の仕事について
指示・助言をする) 2道案内(隣町の者に道を
教える)
- IV 陳情(町長や議員に道の排水工事を頼む)
- V 談判(犬の放し飼いをやめるように求める)
- VI 勧誘(電話で、町内のバス旅行に誘う)
- VII 願望・許可(実家に帰りたいとする申し出を許
す)
- VIII おわび(借りた皿を割ったことを詫げる)
- IX 買い物(靴屋で孫のズック靴を買う)
- X うわさ話(同級生の娘の結婚話)
- 3) 国立国語研究所(1978~)『方言談話資料』(1)は、
全国47都道府県での方言会話の録音・文字化資料で
ある。このうち19の府県については、昭和51年度
に「老年層の男性と若年層の男性との対話、もしく
は、両者を含む3人の話者の会話」を収録している。
(同書「まえがき」p.7による)松田・糸井・日高
1994『方言生活30年の変容』も老年層と青年層の談
話資料を収録している。
- 4) 30代の言語状況について、奄美諸島の中でも徳之島・
沖永良部島でも事情は同じであった。奄美大島では
ほとんど共通語であった。島ごとの共通語化の進行
度については別に報告する予定である。
- 5) to:tuganaʃi(ありがとう)は、「尊しがなし」から
と考えられている。「がなし」は尊称の接尾辞。to:tu
の省略形でよく用いられる。
- 6) グロツタルストップ?は与論島方言で、まだ?ja(呼
びかけ詞)とja:(家)のように音韻的区別を保って

いる。

- 7) 町2003参照
- 8) 共通語と伝統的方言の中間方言形を、鹿児島市では
「からいも普通語」と呼んでいる。これに倣って、奄
美大島では「トン普通語」(トンは薩摩芋の名瀬方言)、
喜界島では「ハヌス普通語」(ハヌスは薩摩芋の喜界
島方言)と呼んでいる。

参考文献

- 国立国語研究所 1978 方言談話資料(1) 国立国語研究
所資料集10 秀英出版
- 高江洲頼子 1994 ウチナーヤマトグチーその音声、
文法、語彙について— 沖縄言語研究センター研
究報告書3 那覇の方言 沖縄言語研究センター
- 町 博光 2003 「おまえの家に来る」の表現 表現研
究, 78, 25-32.
- 町 博光 1997 中間方言の形成—琉球方言の現状と新
沖縄口の展開— 小林・篠崎・大西(編)方言の
現在 明治書院 Pp.100-113.
- 松田正義・糸井寛一・日高貢一郎 1994 方言生活30年
の変容 桜楓社
- 本永守靖 1984 南島方言と国語教育 飯豊・日野・佐
藤(編)講座方言学10 沖縄・奄美の方言 国書
刊行会 Pp.363-386.
- 本永守靖 1994 琉球圏生活語の研究 春秋社
- 永田高志 1996 琉球で生まれた共通語 おうふう

(2004年3月22日受付)

(2004年6月30日修正版受付)

(2004年8月4日掲載決定)